

おんどりときつね

昔むかし、あるところに、若いオンドリがいました。

ある日、オンドリが生け垣の上で日向ぼっこをしていると、キツネが通りかかりました。オンドリはまだ若かったので、キツネがおそろしい動物だということを知りませんでした。

オンドリは素敵な声で「コケコッコー」と挨拶しました。

キツネはオンドリを見上げて、

「いい声だねえ。でも、もうちよつと大きな声で歌ってごらんよ」といいました。オンドリはよろこんで、もう一度歌いました

「コケコッコー」

「すばらしい！だけど、さっきのほうがよかったな。だつて、のどをもつと大きく開けていたよ」

オンドリは、ありつたけの力をふりしぼって、もう一度歌いました。キツネは、

「ああ、すばらしい。でも、目をつぶってごらん、もつといい声が出るよ」といいました。

オンドリは目をつぶってもう一度歌いました。

「ああ、ウグイスが歌っているみたいだ。もう一度きかせてくれ！」

オンドリは、目をしつかりつぶって、もう一度歌いました。そのとたん、キツネは、ひとつ飛びで生垣にとびあがり、オンドリを口にくわえて、走り出しました。

やつとオンドリは、今、自分がどんな目にあっているのかわかりました。

オンドリは走っているキツネにいいました。

「ぼくをどこへ連れて行って食べるの？」

「カッタネオー……」とキツネは、くわえた口をゆるめないようにいいました。

「ええっ？ どこだつて？」と、オンドリはもういちどききました。

「カッタネオー……」

「それじゃ、よくわからないよ、もつとはつきりいつてよ」

「カッタネオー……」

キツネがちゃんといおうとして口を開けたとたん、オンドリは近くの木にぱつと飛びあがりました。キツネは下からながめていいました。

「ちくしょう！必要もないときにしゃべっちゃまった！」

オンドリは、

「おれだつて必要もないときに歌わされたよ！」といいましたとき。

原話…『語りのメソッド』剣持弘子著／三弥井書店

再話…村上郁